袖ケ浦市大塚台遺跡

——袖ケ浦アクセス系光設備埋蔵文化財調査報告書——

平成９年３月

日本電信電話株式会社

財団法人　千葉県文化財センター

袖ケ浦市大塚台遺跡

―― 袖ケ浦アクセス系光設備埋蔵文化財調査報告書 ――

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第311集として、日本電信電話株式会社の袖ケ浦アクセス系光設備建設事業に伴って実施した袖ケ浦市大塚台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代の竪穴住居跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また袖ケ浦市の歴史や文化財への理解を深めるために広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成９年３月３１日

財団法人千葉県文化財センター

理事長　　中　村　好　成

凡　　例

1　本書は、日本電信電話株式会社千葉設備建設センターによる袖ヶ浦アクセス系光設備建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市岩井1,065-1に所在する大塚台遺跡(遺跡コード229－016)である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本電信電話株式会社千葉設備建設センターの委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査部長　西山太郎、南部調査事務所長　高田　博の指導のもと、研究員　土屋治雄が、下記の期間に実施した。

発掘調査　　平成７年12月４日～12月20日

整理作業　　平成８年４月１日～４月30日

5　本書の執筆は、研究員　土屋治雄が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本電信電話株式会社千葉設備建設センターの御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　１／25,000地形図「姉崎」(NI-54-19-16-4)「上総横田」(NI-54-19-16-3)

第２図　参謀本部陸軍部測量局作成　１／20,000　迅速測図　「奈良輪村」「眞里村」

第３図　袖ヶ浦市地形図　№26　１／2,500

8　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和46年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。

10　本書で呼称した遺構番号は、調査時に呼称した番号を使用している。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査の経緯と方法……1
　2　遺跡の位置と環境……1
　　（1）　遺跡周辺の地理的環境 ……1
　　（2）　遺跡周辺の歴史的環境 ……4
Ⅱ　検出した遺構と遺物……6
　1　調査成果の概要……6
　2　遺構と遺物……6
Ⅲ　まとめ……11
報告書抄録……巻末

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡(1／25,000) …2
第2図　遺跡周辺の地形図(1／20,000) ……2
第3図　調査区と周辺の地形(1／2,500)……3
第4図　大塚台遺跡遺構配置図(1／100)……5
第5図　3号竪穴住居跡実測図……7
第6図　3号竪穴住居跡火床部実測図……7
第7図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) ……7
第8図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) ……8
第9図　8号掘立柱建物跡と柱穴群実測図……8
第10図　7号竪穴状遺構実測図……9
第11図　1号・2号・4号・6号土坑実測図……9
第12図　遺構外出土遺物実測図……10

図 版 目 次

図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　遺跡全景　3号竪穴住居跡全景
　　3号住居跡土器出土状況
図版3　8号掘立柱建物跡　7号竪穴状遺構
　　1号・2号土坑
図版4　4号土坑　5号土坑　6号土坑
図版5　3号竪穴住居跡出土遺物
　　1A-77出土旧石器　発掘作業風景

Ⅰ　はじめに

1　調査の経緯と方法

日本電信電話株式会社千葉設備建設センターは、袖ヶ浦アクセス系光設備建設事業を計画し、事業地区内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した。その結果、工事を行う前に発掘調査を行い、遺構、遺物の記録保存の措置を講ずることとなり、平成７年12月に財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。

発掘調査は、縄文時代から平安時代にわたる200㎡の上層の本調査と事業範囲の2％（４㎡）を対象とした旧石器時代の確認調査を行った。

上層の本調査は、バックホーにより表土を除去することから始めた。調査区の現況は草地であったが、ある時期湿地になっていたようである。その後、岩井地区一帯は土砂や残土で埋め立てられた。そのため、撹乱（かくらん）が激しく遺構検出面の確認に苦慮した。埋土及び表土除去終了後全域の精査及び遺構検出に移行した。調査区一帯が湿地であったことから、関東ローム層は焦茶色に硬く変質していた。

発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20ｍ×20ｍの方眼の大区画（グリッド）を東西２区画、南北３区画設定し、西から東に向かってＡ・Ｂ、北から南にむかって１・２とし１Ａ、２Ｂなどと呼称した。更に、大グリッド内を２ｍ方眼の小区画（グリッド）に分割し、西から東へ00(区)・01(区)・・・・09(区)、北から南へ00(区)・10(区)・・・・90(区)とした。したがって、各々の小グリッドは、1Ａ－00、2Ｂ－50、3Ｃ－55などと呼称した。遺構番号は、調査順に１号跡、２号跡のように付した。遺物の取り上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層の遺物については2ｍ×2ｍの小グリッドごとに取り上げた。

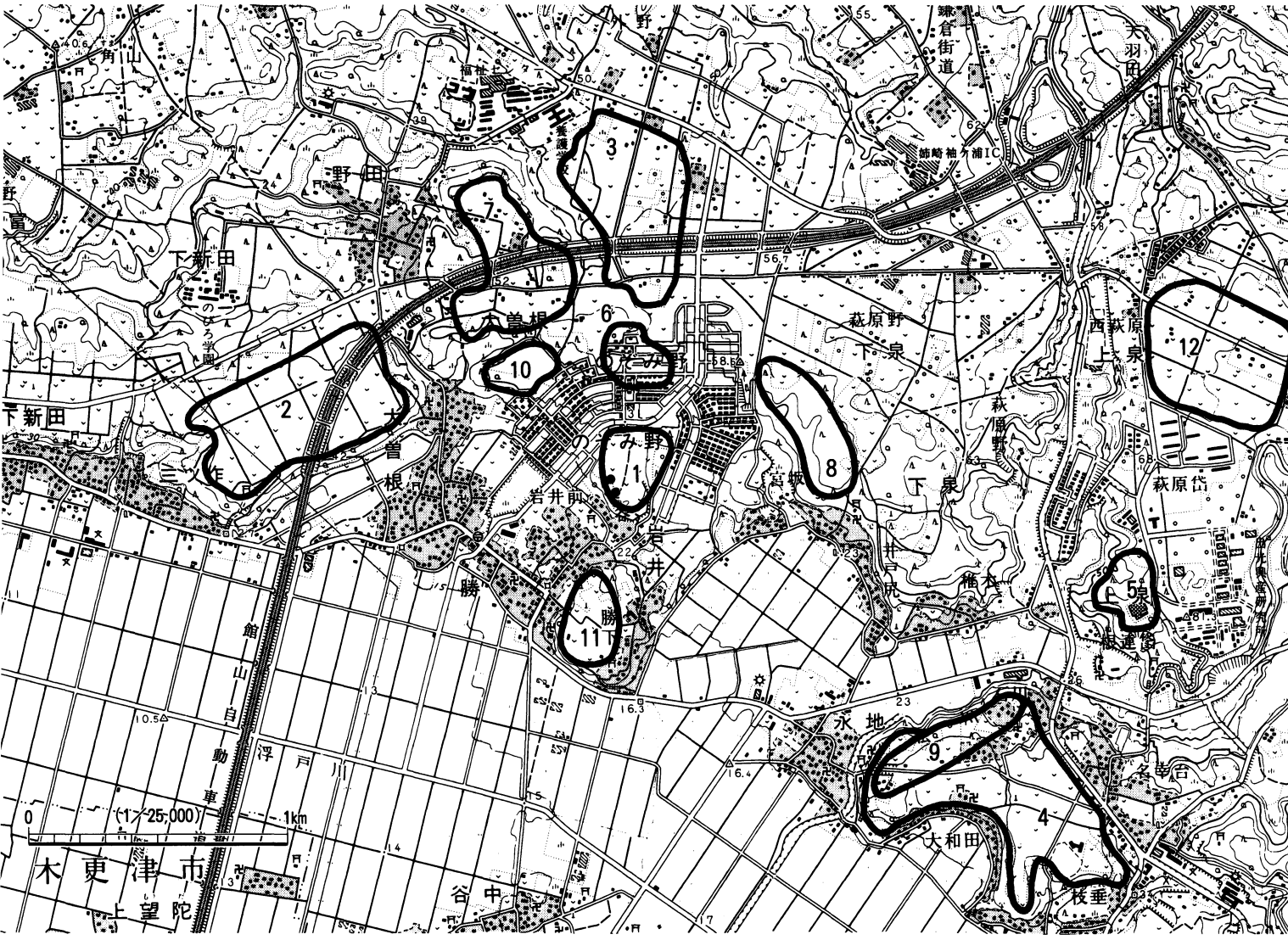
下層の確認調査は2ｍ×2ｍのグリッドを１か所設定し武蔵野ローム層上面まで掘り下げを行ったが、遺物は出土しなかった。

2　遺跡の位置と環境

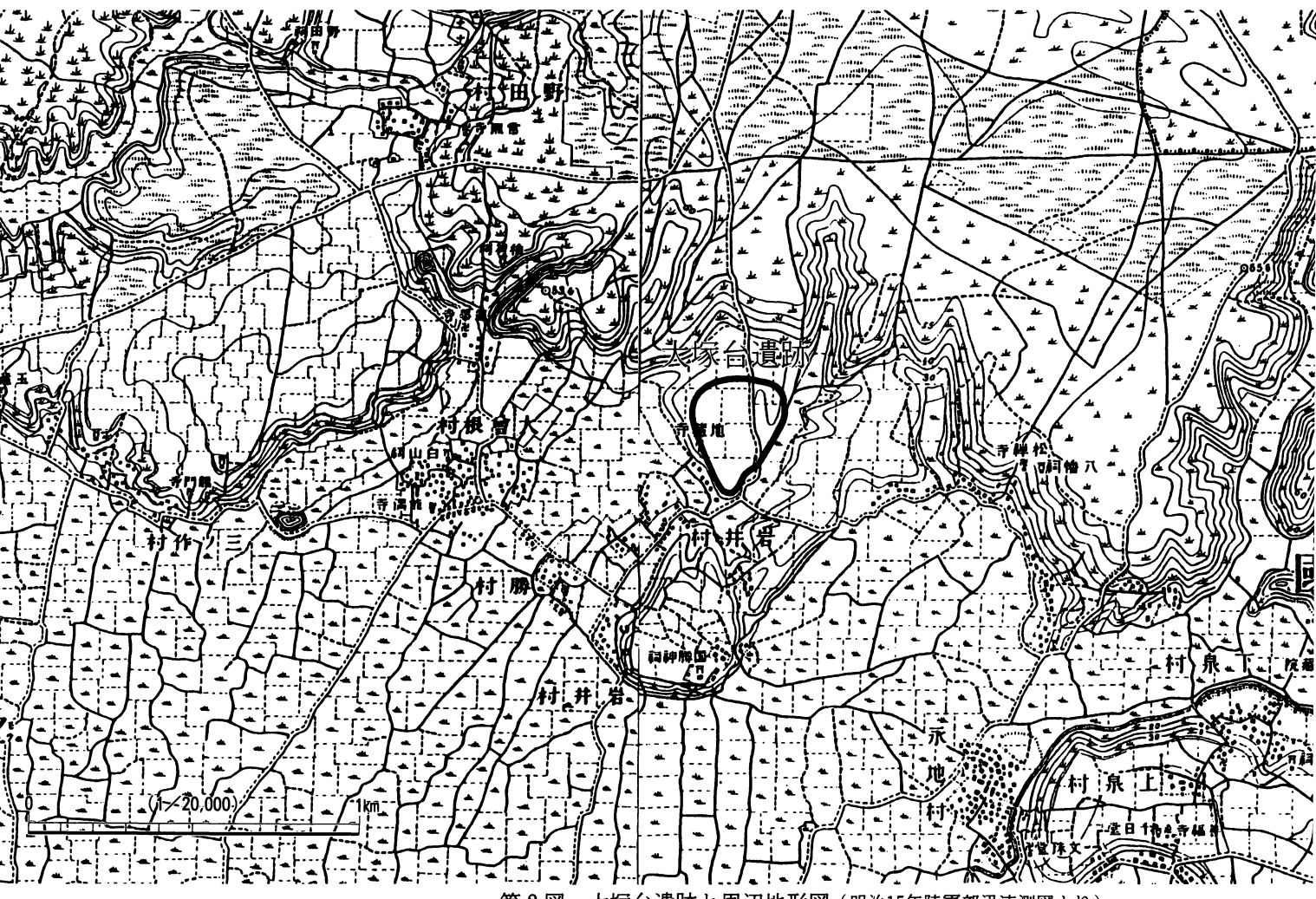
（１）遺跡周辺の地理的環境　（第１図～３図、図版１）

大塚台遺跡は、千葉県袖ヶ浦市のほぼ中央部に位置し、標高は約30ｍである。袖ヶ浦市は、千葉県中西部に位置し、北と東で市原市、南で木更津市と接し、西側は東京湾に面している。遺跡から現在の海岸までの距離は4.6kmである。袖ヶ浦市の大部分は、小櫃（おびつ）川によって形成された、東京湾に向かって開く広い沖積地になっている。また、北東部と南東部は丘陵地帯となっている。遺跡は、小櫃川の下流に位置し、支流松川の北岸台地に立地する。この台地からさらに南に向かって舌状に延びる台地の基部付近に位置する。東側には松川によって開かれた谷、西側にも谷が認められる。調査区南側にも、ごく小さな谷が認められる。

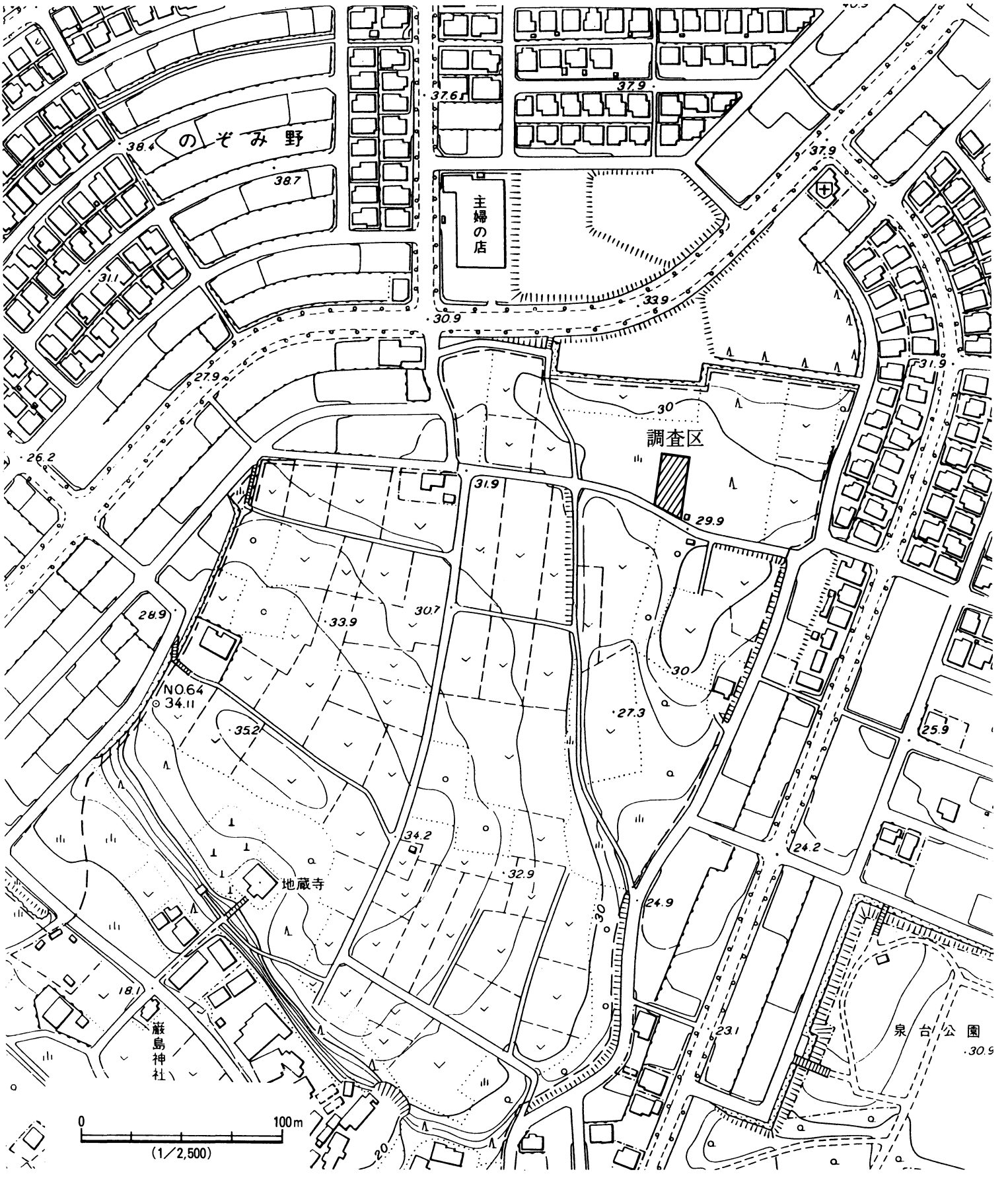
遺跡北側の広い台地上では畑作、南側の沖積地では水田耕作が行われている。遺跡の周囲は、昭和47年以来、大規模な宅地造成が行われ、住宅街が形成されている。このため、地形がかなり改変されており、かつての面影は失われている。



第１図　大塚台遺跡と周辺の遺跡（国土地理院 1／25,000「姉崎」「上総横田」）



第２図　大塚台遺跡と周辺地形図（明治15年陸軍部迅速測図より）



第3図　調査区と周辺の地形（縮尺1／2,500）

（２）遺跡周辺の歴史的環境　（第１図、図版１）

大塚台遺跡は、千葉県埋蔵文化財分布地図(3)[1]によれば、弥生土器、土師器、須恵器が表面採集されており、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の遺跡とされている。大塚台遺跡(1)周辺の台地上には、数多くの遺跡が所在する。これらの遺跡の時期は、旧石器時代から奈良・平安時代に及んでいる。発掘調査も、数か所の遺跡で実施されている。特に東関東自動車道建設に伴う発掘調査が大規模に行われ、本遺跡周辺における各時代の様相が明らかになってきている。ここでは、分布調査での所見と併せて、各時代の遺跡について概観することとしたい。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡の北から西にかけて認められる。これらの遺跡は、比較的広い台地上に立地する。本遺跡の西に位置する関畑遺跡(2)では、15か所で石器群が検出されたほか、11地点から石器を出土している。[2] 遺跡の北側に位置する台山遺跡(3)では、17か所で石器が出土している。[3]

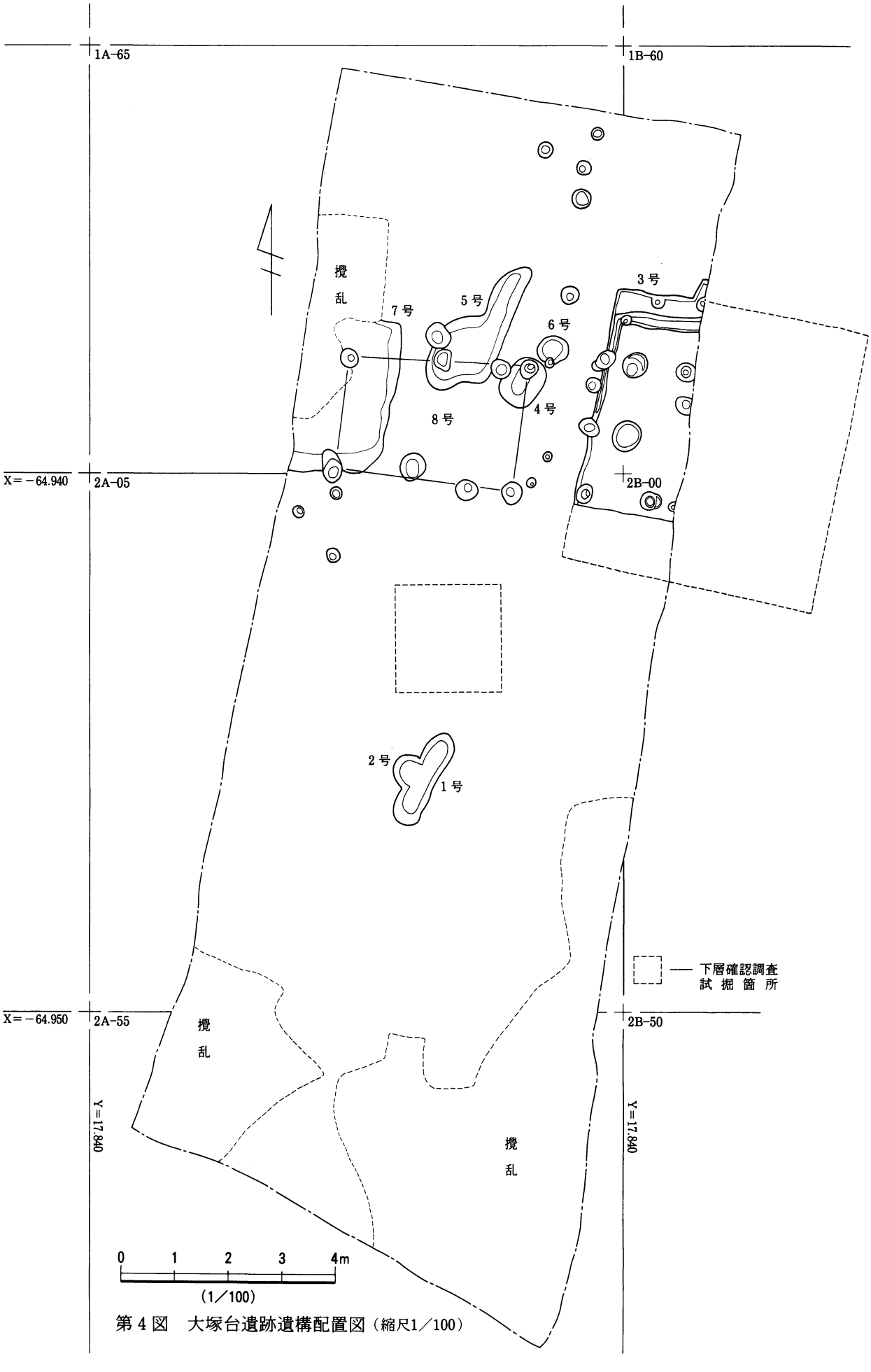
縄文時代の遺跡は、本遺跡の北側に数多く認められる。これらの遺跡は、樹枝状に開析された谷を望む台地縁辺部に立地している。西側には関畑遺跡、南東側にも松川により開析された谷を望む台地上に、上泉遺跡(4)や打越岱遺跡(5)が存在する。関畑遺跡(2)では、平成３、４年に調査が実施され、縄文時代早期の陥穴が27基検出された。打越岱遺跡(5)は、昭和60、61年の二度にわたり調査が実施されている。遺構には、早期の住居跡のほか、炉穴、陥穴がある。また、自然礫、破砕礫の集中地点が数か所において認められた。

弥生時代の遺跡は、小支谷や、沖積地を望む台地縁辺部に立地している例が数多く見受けられる。前記の関畑遺跡(2)において、遺跡南西側から、弥生時代後期の住居跡が33軒、遺跡北東側から同時期の方形周溝墓が７基検出された。遺跡北側の山王辺田遺跡(6)では、後期の住居跡４軒が検出されている。また、遺跡北西側の山谷遺跡(7)でも、後期の住居跡が３軒検出されている。

古墳時代の遺跡は、弥生時代とほぼ同様の立地を示している。台山遺跡(3)では、平成４年から５年の調査で、古墳時代前期の住居跡が113軒検出されている。山王辺田遺跡(6)でも、同じく前期の住居跡が57軒検出されている。古墳は、本遺跡の東側に前方後円墳１基、円墳12基からなる大塚台古墳群(8)、南東には円墳10基からなる上泉古墳群(9)が認められる。同古墳群中の上ノ山古墳は、直径40ｍ、高さ3.5ｍの二段構築の円墳と考えられている。このほか、墓山古墳群(10)は、円墳３基と塚４基が団地内の公園の一角に現状保存されている。山王辺田遺跡内においても20基前後の古墳が検出されている。本遺跡の南に位置する宮ノ台遺跡(11)は祭祀遺跡であり、石製模造品、鉄製模造品、手捏土器等の出土が報告されている。

奈良・平安時代の遺跡には、関畑遺跡(2)、打越岱遺跡(5)、東萩原遺跡(12)がある。このうち、関畑遺跡では、平安時代の住居跡４軒と、同時期の墓の可能性がある方形周溝状遺構５基が検出されている。打越岱遺跡では、８世紀中頃に位置付けられる方形周溝状遺構４基が検出されており、周辺に所在する集落の墓域と考えられる。

注１　(財)千葉県文化財センター　昭和62年　『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)－市原市・君津・長生地区』
　２　(財)千葉県文化財センター　平成４年度　『千葉県文化財センター年報 №18』
　３　(財)千葉県文化財センター　平成５年度　『千葉県文化財センター年報 №19』



第4図　大塚台遺跡遺構配置図（縮尺1／100）

Ⅱ　検出した遺構と遺物

1　調査成果の概要　（第４図）

検出した遺構は、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡１棟、柱穴群１か所、土坑４基、竪穴状遺構１基である。遺物は、古墳時代後期の土師器が中心であるが、ほぼ完形に近い土師器の甕と土製支脚のほかは小片であった。古墳時代以外の遺物では、旧石器時代の可能性の高い剥片１点のほか、弥生土器の小片１点、中・近世の陶器片１点が出土した。

2　遺構と遺物

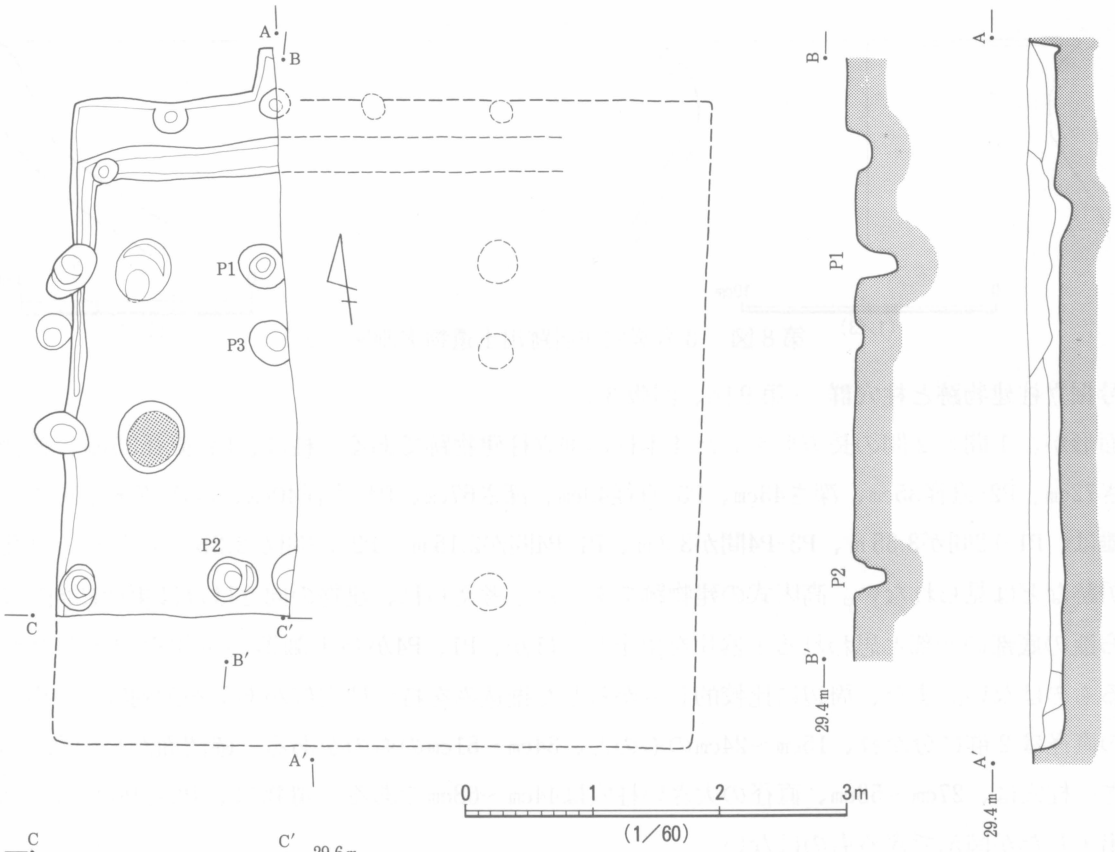
3号竪穴住居跡　（第５図～８図、図版２、５）

住居跡の東側約2/3は調査区外となるため未調査であるが、平面形が正方形の竪穴住居跡であったと思われる。主軸はほぼ東西を向くが30度北に傾いている。検出面からの掘込みの深さは12cm～17cmであり、確認できた西辺は4.1ｍ、北辺は1.1ｍであるが、調査区境界に見られた土層断面の状況から、住居の南北の長さは5.5ｍである。踏みしめなどによる床面の硬化は見られなかった。

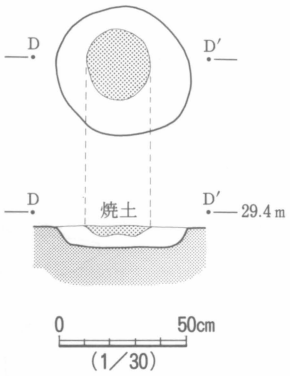
西壁中央から30cm離れた位置で遺物が比較的まとまって出土し、遺物の下からカマドの火床部の可能性がある焼土が検出された。焼土は、長径60cm、短径50cmで、焼土の厚さは８cmである。カマドの構築材の山砂、粘土等は検出されなかった。壁周溝は西辺北半部に掘られている。また、北壁から40cm程南側に、北壁とほぼ平行して東西方向に溝が掘られている。主柱穴は２基で、Ｐ１は直径35cm、床面からの深さは23cm、Ｐ２は直径が30cm、深さは27cmである。Ｐ１の南側にＰ３があり直径が33cm、深さ17cmである。北壁と平行する溝とＰ３柱穴は住居が拡張される前の施設である可能性が高い。住居のコーナーは、拡張前がやや隅丸であるが、拡張後は直角に掘られている。また、壁際に６基の小柱穴が巡っており、直径は20cmから40cm、床面からの深さは29cmから38cmである。ほぼ等間隔に巡っており、柱間の間隔は北壁側が約60cm、西壁側は約90cmであった。

遺物は、西壁中央近くの焼土周辺のほか、住居跡北西隅から比較的まとまって出土した。

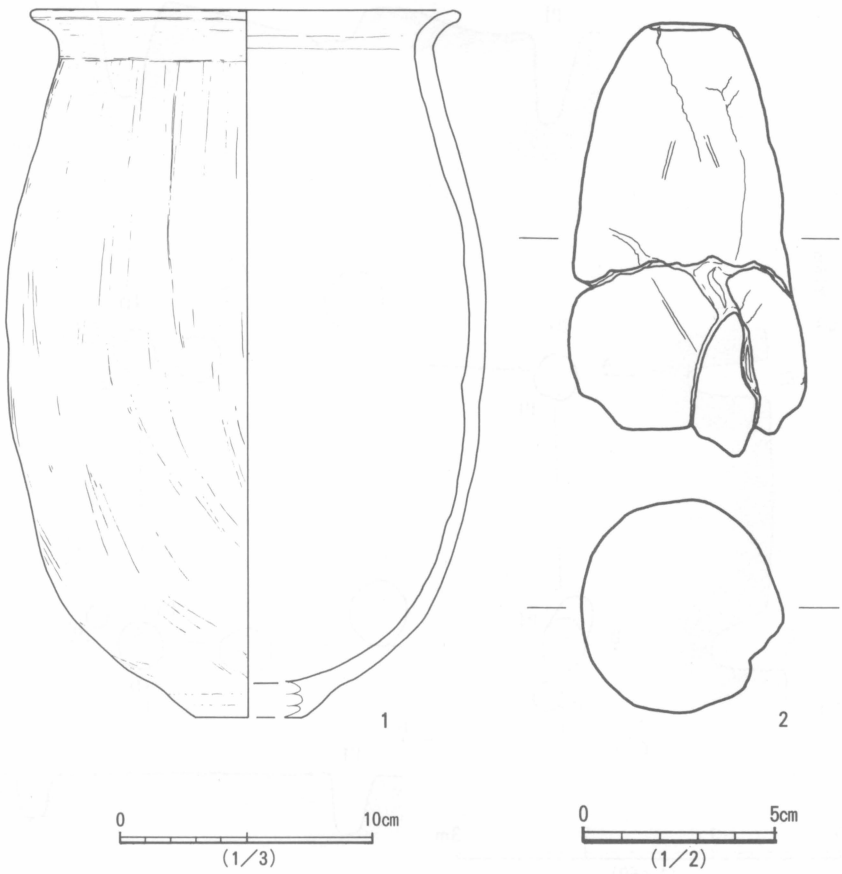
１は、北西隅から出土した土師器の甕で口径は16.8cm、高さ27.5cm、復元底部径4.2cmである。胴下半の一部と底部2/3を欠く。外面は暗茶褐色、内面は暗赤褐色で胎土に白色砂粒、石英粒を多く含む。焼成はやや不良で表面の剥落が著しく、煤の付着が認められる。口縁部は横ナデ、頸部から胴中央部にかけては縦方向のヘラケズリ、胴下半は斜め方向のヘラケズリが見られる。２は、焼土周辺出土の土製支脚であり下部を欠損している。形態は下部が広がる台形状であり、上面は平坦である。残存している高さは11.1cmで、上端の直径は2.3cmであり、若干の砂粒を含む。３は、焼土内から出土した土師器の甕である。口縁部はヨコナデ整形され、胎土には砂粒や微細な黄色土粒を含んでおり、茶褐色を呈する。口縁部は緩やかに広がっている。口縁部の1/4ほど遺存しており、復元口径は17cmである。４は焼土内出土の土師器の杯の小片である。



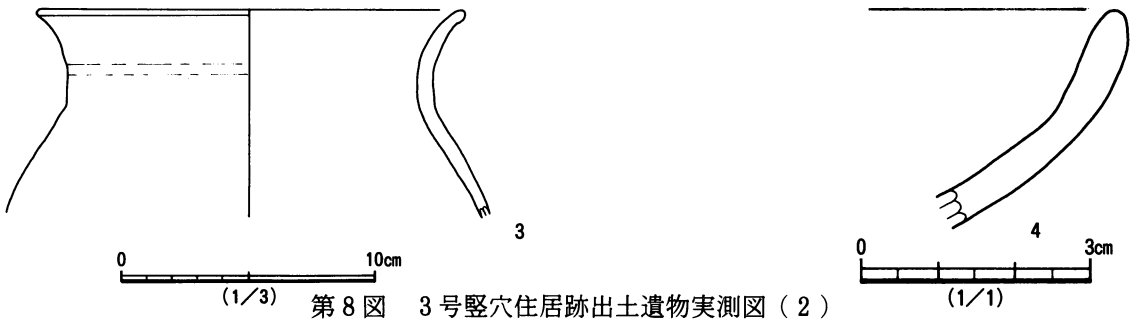
第5図　3号竪穴住居跡実測図



第6図　3号竪穴住居跡
火床部実測図



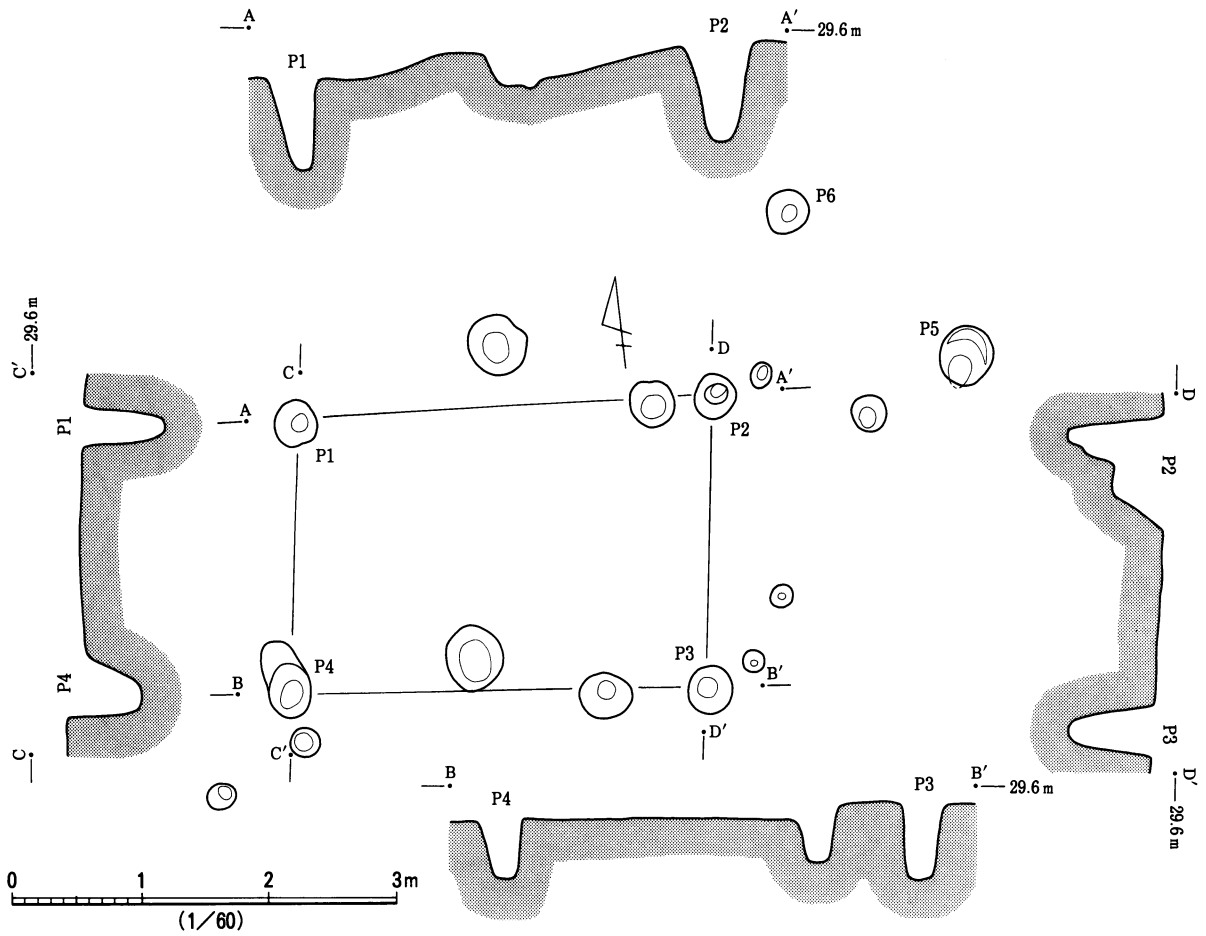
第7図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）



第８図　３号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）

８号掘立柱建物跡と柱穴群　（第９図、図版３）

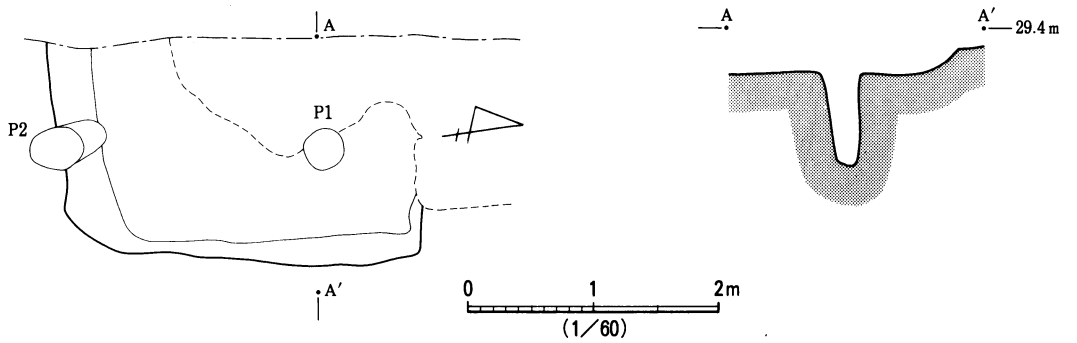
平面形が、１間×２間の長方形をした４本柱の掘立柱建物跡である。柱は、P1-直径35cm、確認面からの深さ72cm、P2-直径35cm、深さ43cm、P3-直径40cm、深さ67cm、P4-直径40cm、深さ57cmである。柱穴間の距離は、P1-P2間が3.35ｍ、P3-P4間が3.3ｍ、P1-P4間が2.15ｍ、P2-P3間が2.35ｍである。硬化した床面や炉跡などは見られない。高床式の建物跡であったと考えられ、建物の向きはほぼ東西に向いている。P3から甑（こしき）の底部の一部と思われる土器片を出土したほか、P1、P4から土師器の小片を出土したが、図示できるものはない。また、周辺に比較的しっかりした掘込みを持つ柱穴群があるが配列はつかめなかった。柱穴の直径は２群に分かれ、15cm～24cmのものと、34cm～51cmのものがある。確認面からの深さは、直径の小さい柱穴は、27cm～58cm、直径の大きい柱穴は44cm～68cmである。遺物は、P5とP6から土師器の小片を出土したが図示できるものはない。



第９図　８号掘立柱建物跡と柱穴群実測図

7号竪穴状遺構（第10図、図版3）

平面形が方形を呈すると思われる竪穴状遺構である。確認できた南北辺は2.8ｍ、東西辺1.7ｍであり、西は調査区外、北側は撹乱を受け不明である。確認面からの深さは18cmである。炉はなく、硬化した床面は見られなかった。柱穴が2基あり、P1は直径35cm、床面からの深さは72cm、P2は直径42cm、深さ55cmである。壁は斜めに立ち上がっている。遺物は出土していない。



第10図　7号竪穴状遺構実測図

1号土坑・2号土坑（第11図、図版3）

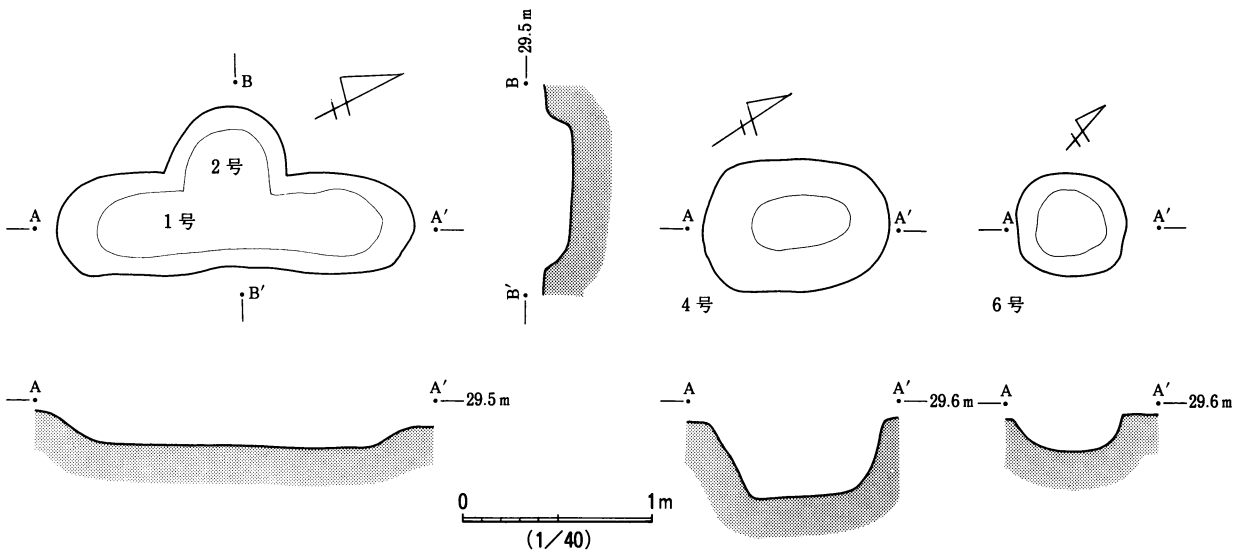
平面形が長楕円形と円形をした土坑で、重複していると思われるが、覆土の堆積状況からは新旧関係は確認できなかった。1号跡は、長径が1.85ｍ、幅53cm、確認面からの掘込みの深さは13cmである。断面形は皿状を呈している。2号跡は直径60cmの円形で、確認面からの掘込みの深さは14cmである。断面形は皿状をしている。両遺構とも遺物は出土していない。

4号土坑（第11図、図版4）

平面形が楕円形をした土坑である。長径は96cm、短径は68cm、確認面からの掘込みの深さは42cmである。底面は平坦で、断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

6号土坑（第11図、図版4）

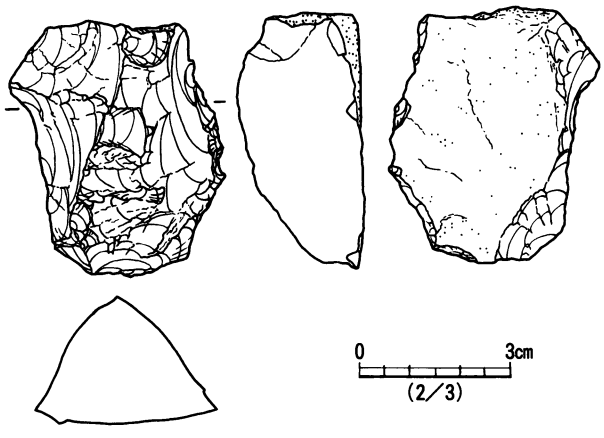
平面形がほぼ円形をした土坑である。直径は58cm、確認面からの掘込みの深さは19cmである。断面形は椀状をしている。遺物は出土していない。



第11図　1号・2号・4号・6号土坑実測図

遺構外出土遺物　（第12図、図版５）

1A-77区から出土した加工痕を有する剥片(はくへん)である。素材は、節理によって剥離した厚手の破片で、背面は自然面に覆われている。左側面は、折断されており、周縁に細かい加工が施されている。スクレイパー(掻器(そうき))の未製品の可能性がある。石材は茶褐色をした頁岩(けつがん)である。



第12図　遺構外出土遺物実測図

Ⅲ　ま と め

今回の調査は、大塚台遺跡の北端の200㎡を調査したものであるが、大塚台遺跡としては初めての調査となる。この調査によって得られた資料は、本遺跡の全体像を知る上での一端にすぎないが、貴重な資料を得られたものと考えられる。

本遺跡は、埋蔵文化財分布調査[1)]では弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代の遺跡とされている。

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡が1軒検出され、遺跡には古墳時代後期の集落が存在することが明らかになった。調査面積が狭く、断定することはできないが、遺跡の広範囲に土器が散布し、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代を通じてほぼ空白なく人々の生活が営まれた遺跡である可能性が高くなったと言えよう。

発見された竪穴住居跡の立地について述べておきたい。周囲は大規模な住宅団地の造成の影響で、地形が大きく改変されているが、現在残されている原地形から類推すると今回の調査区は、大塚台遺跡の台地平坦面からは一段低く標高は約29ｍで、台地(遺跡)平坦面との比高差は約3ｍあり、南方向から調査区へ向かって入り込んでいる幅30ｍほどの小支谷の最奥部に位置していたと思われる。今回検出された竪穴住居跡の立地は、現在の地形を見る限りではあるが、斜面を降りきった谷のテラス状の平坦地に位置しており、集落の立地の変遷を知る上の一つの資料となると思われる。

竪穴住居跡は、住居跡の約1/3ほどしか調査されていないため、現時点では不確定な部分が多い。住居跡は、拡張前の住居のものと思われる壁周溝と柱穴が検出されており、比較的長い期間の居住が推定される。住居跡からは、カマド施設が検出されなかった。しかし、火床部の可能性のある焼土付近の床面から完形に近い支脚が出土しているので、カマドがあった可能性は高いと言えるであろう。通常では煙道が設けられているべき位置に、柱穴が検出されているが、重複する他の遺構のものと思われる。なお、壁際から等間隔に並んで検出された6基の壁柱穴は、竪穴住居の上屋構造を考える上での一つの資料となるものと思われる。

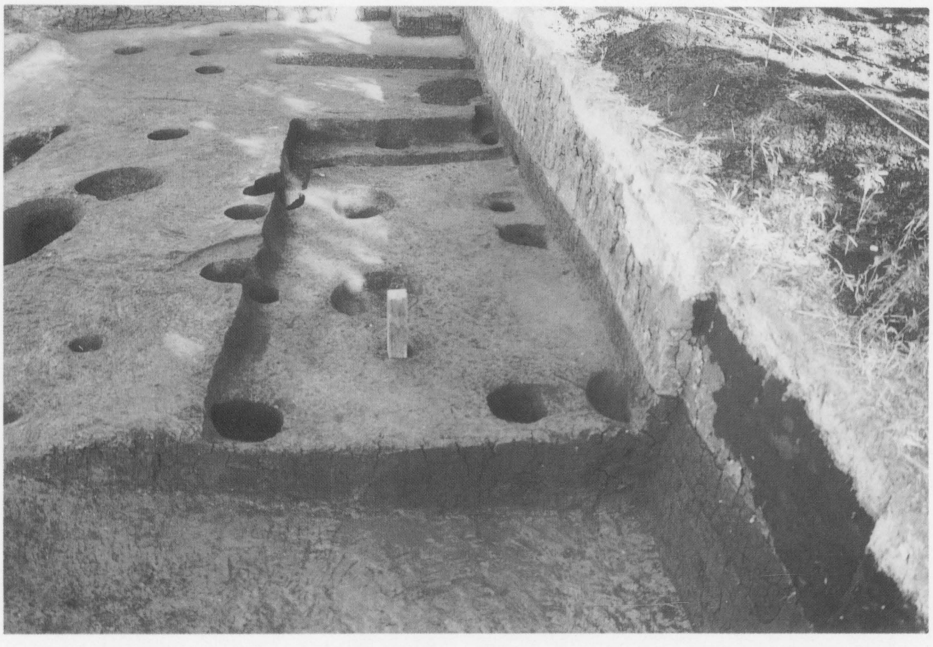
注1　(財)千葉県文化財センター　昭和62年　『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)－市原市・君津・長生地区』

遺跡周辺航空写真（京葉測量株式会社 昭和46年撮影）

1．大塚台遺跡
2．関畑遺跡
3．台山遺跡
4．上泉遺跡
5．打越岱遺跡
6．山王辺田遺跡
7．山谷遺跡
8．大塚台古墳群
9．上泉古墳群
10．墓山古墳群
11．宮ノ台遺跡
12．東萩原遺跡

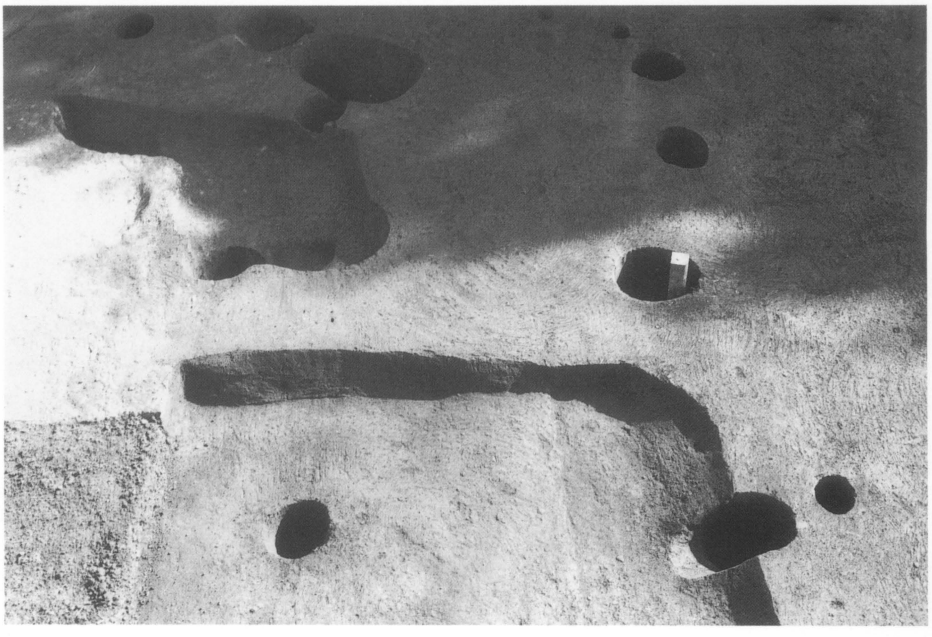
図版 2

調査区全景



3 号竪穴住居跡全景

3 号竪穴住居跡
土器出土状況

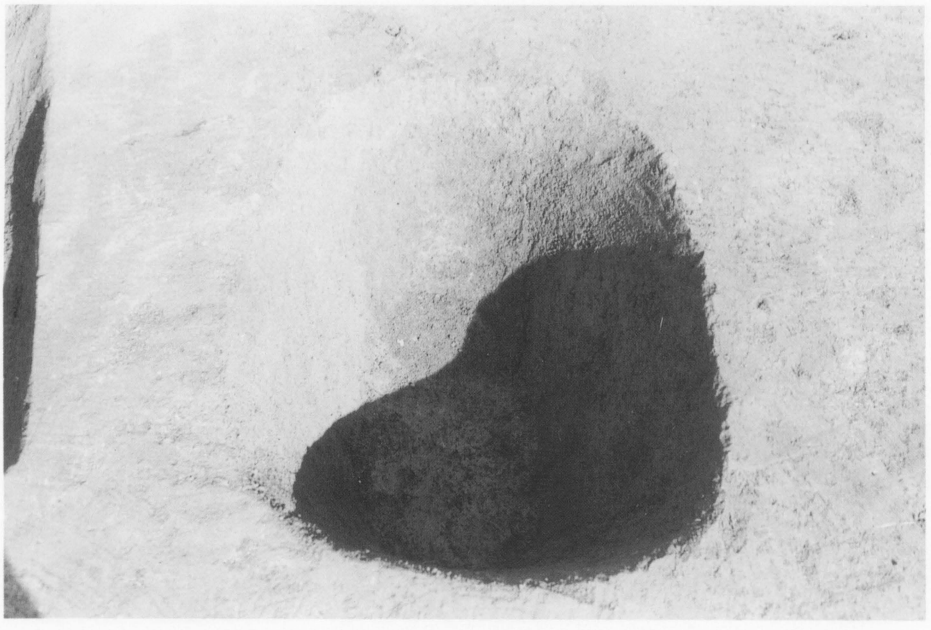


8 号掘立柱建物跡

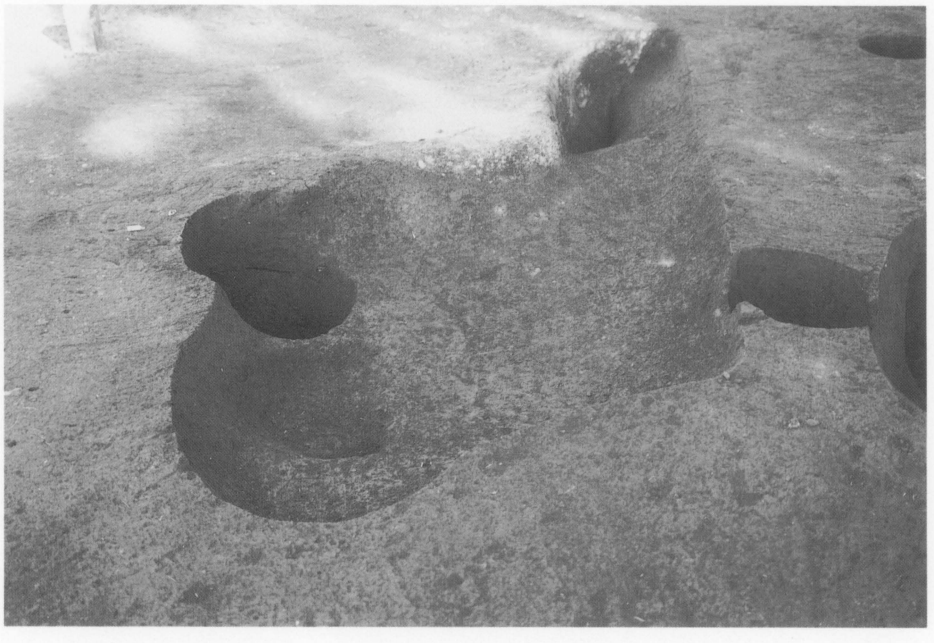
7 号竪穴状遺構

1 号・2 号土坑

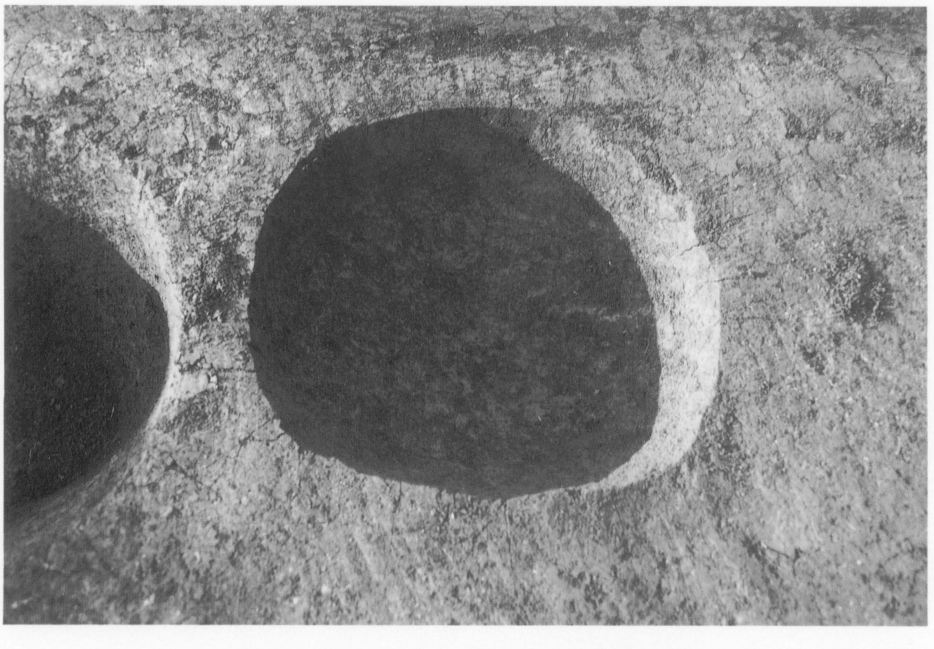
図版 4



4 号土坑



5 号土坑



6 号土坑

（1/3）

甕（3号住居跡）

（1/2）

カマドの支脚（3号住居跡）

原寸

1A-77出土旧石器

発掘作業風景（椿・横田班）

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしおおつかだいいせき
書名	袖ケ浦市大塚台遺跡
副書名	袖ケ浦アクセス系光設備埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第３１１集
編著者名	土屋治雄
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒２８４　千葉県四街道市鹿渡８０９－２番地　TEL　043-422-8811
発行年月日	西暦１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大塚台遺跡（おおつかだいいせき）	千葉県袖ケ浦市岩井（ちばけんそでがうらし いわい）1065－1	229	016	35度 24分 48秒	140度 1分 46秒	19951204～ 19951220	200㎡	アクセス系光設備に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大塚台遺跡		旧石器時代		剥片	
	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	竪穴住居跡　1軒 掘立柱建物跡　1棟 竪穴状遺構　1基 土坑　5基 柱穴群　1か所	土師器 支脚	
		中・近世		陶器	

千葉県文化財センター調査報告第311集

袖ケ浦市大塚台遺跡

袖ケ浦アクセス系光設備埋蔵文化財調査報告書

平成9年3月31日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　日本電信電話株式会社
千葉県千葉市千葉港8-3

財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2

印　　刷　　大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市潮浜2-1-10